

劔沢幻視行

ある大学山岳部員の軌跡

和田城志

第三章 劔沢初溯行一九七六

ちよつと、余談

連載をしているのに失礼ながら、山岳雑誌をあまり読んだことがありません。だから、山岳界の動向に疎いのです。これではだめだと思い、最近一年間の『岳人』を読みました。驚きました。私がこれから書くこうとしている登山などハイキングのように思えてきます。過激に素敵な登山がされていて、嬉しく思いました。私の文章を世に出してくれた、元『岩と雪』編集長、池田常道さんが連載されている「現代アルピニズムのプロファイリング」にはこれからの登山が明確に表されています。先月号で、パイオニアワークという言葉を使いました。この言葉は思弁的な登山の動機を理解するためのキーワードでした。適切な説明だと思いますが、登山への傾倒はそれだけでは説明できません。もう少し複雑です。岳人七三三号に載せられた「パイオニア精神の継承と新時代の登山」（井上達男）を読んで、懐かしさと共に論点が少し教条的に感じられて、旧き良き時代への大学山

岳部エールを思い起こしました。私も同時代を生きてきたから分かります。揚げ足取りをする気はありませんが、これから連載の中でくりかえし書くだろう私の考えが異を唱えるのです。著者は論点を要約して次のように書いています。

（もう山登りに未知を切り開く精神は失われたのか？ 登山の本質とは、新しい疑問と課題を設定し、探求すること。次世代にその達成感とビジョンを示さなければ、山登りの退潮に歯止めはかけられない。知られざる東チベット踏査を通して考えたパイオニアワークの復権）

以下、（）内は井上さんの言葉、もしくは引用文章からの引用です。

未知なる山とは何をさすのでしょうか。現代における未踏峰の魅力とは何でしょうか。管理された野性の自然（ウィルターネス）は何をもたらすのでしょうか。かつて、地理的探検初登頂の時代には、国威と登山実績には関連性がありました。オリンピック競技もそうでしょう。しかし現代において、メスナー、ククチカ以来の東欧、旧ソ連

PROFILE

わだ・せいし 1949年高知県生まれ。大阪市立大学山岳部出身。1970年に劔沢大滝を遠くに見て登山にのめり込む。1976年に劔沢溯行。1977年、登山の下調べでインドやヒマラヤを放浪、1978年、セントIIとランタンリルンに登頂。1983年劔沢積雪期溯行。1984年カンチェンジュンガ縦走、ナンガバルバット、1985年マッシュアブルム、ブロードピーク登頂。ヒマラヤのアルパインスタイルにおける黎明期に活躍し、1986年ナンガバルバット再訪。1987年冬立山での滑落遭難で右膝の十字靭帯を失うものの、その後も冬の黒部・劔、ナンガバルバットと鮮烈なる登山を続ける。簡潔で誠実でありながら迫力のある登山報告や独自の登山論が人気を博す登山家。

などの驚くべき登山は、国の活力には無関係です。否、閉塞的な社会だからこそ、若者のパッションが爆発するのではないかと思えるほどです。

真のパイオニアワークとは、昔からアルパート・ママーリのように（ごく限られた人たちが登山に人生をかけて極限登山を試みている）ことなのではないでしょうか。登山の本質は極めてアナキーなもので、（日本の登山界は決して退廃期にある）のでは決してありません。本来の姿に戻っているのかもしれない。こんなことを言うと、すべての大学山岳部出身者に怒られるかもしれませんが、マナスル以後のすべての大学山岳会のなしたヒマラヤ遠征は、（新しい疑問と課題を設定し探求する）ことにおいて山学同志会のジャヌー北壁と山野井泰史のギャチュンカン北壁に遠く及びません、ヘルマン・プーブルがステイブ・ハウスに負けていないのと違って。

登山には（世代を超えた共通の夢）があるのでしょうか。個人主義という意味は、利己的という意味か自己的という意味かで異なりますが、（山行は自己の目的を満たすため相手を活用する）のであれば、相手の目的を満たすため自己も活用される訳で、組織論を超えたザイルシャフトを指し

ているのです。登山には集団主義はなじみません。登山は元々個から始まりました。個を凌駕した対象に対して便宜的に集団を組んだだけです。装備・技術・情報が発展した今、その必要は減りました。探検と登山(冒険)は、個の動機というところで微妙に異なります。探検は理学部ですが、登山は文学部です。検と険の違いです。

私は、観光資源化した登山(五大陸最高峰や百名山への集中)が増えて欲しくありません。野外活動愛好家は育成されるでしょうが、アルピニストは育てられません、勝手に発生するのです。偉そうなことを言いました。(社会人として優秀な人材が育つことも、大学山岳部のミッシヨンである)ならば、私は完璧な落ちこぼれです。この連載の副題を、一ある大学山岳部員の歪んだ軌跡に変更しなければなりません。詩は私の実感です。

山の教え

妄想のなかで過信せずにいられたのは

山のおかげだ

暴走のなかで肉体が頼りになったのも

山のおかげだ

未熟を誇り、傲慢を悦んだ

いならば過去がのしるかたわらで

腐りはじめた自閉がかしこまる

無能は自慰を友として

気付いている空洞を演技する

演技がほんもののように思えてくると

自分のために自分をためそうとする

そうして無意味がよりそって来たとき

まっすぐな視線が山をとらえるのだ

行為、反芻、ささやかな自負

残照の尾根に刻まれたトレール

ラッセルのその一步一步が答なのだ

山が論してくれている

私は、山のおかげだと、声をつまらせる

神戸大学のバタゴニア、アレナレス峰初登頂を

導いた高木正孝は、井上さんの大先輩に当たりま

す。東京帝大の同期の田口二郎は次のように彼を

評しています。

「高木にとって登攀は山という外界物と、彼に深

く内在するエゴとのたえまない接線であって、こ

れから生じるドラマチックな複雑な経験の起伏

が、登山の同伴者の存在とはおかまいなしに、さ

まざまな心理的振幅を、彼の心の世界に呼び起

していたに相違ない。いや、彼は自分を山とい

場の実験の具に供して、自分をたえまなく凝

視していたのだ」(山と友―東大山の会五十周年

記念)一九八一年

新時代の登山に未来があるかどうか分かりませ

んが、あるとすれば、このような精神のクライマ

ーによって切り開かれるでしょう。山野井泰史の

ように高木の精神を受け継ぐ登山家は絶えること

はないでしょう。私は劔沢大滝を、探検的登山の

残り香の中に、クライマーの視点で懐かしんでい

るのです。「幻視行」とはそういうことです。

大滝への道

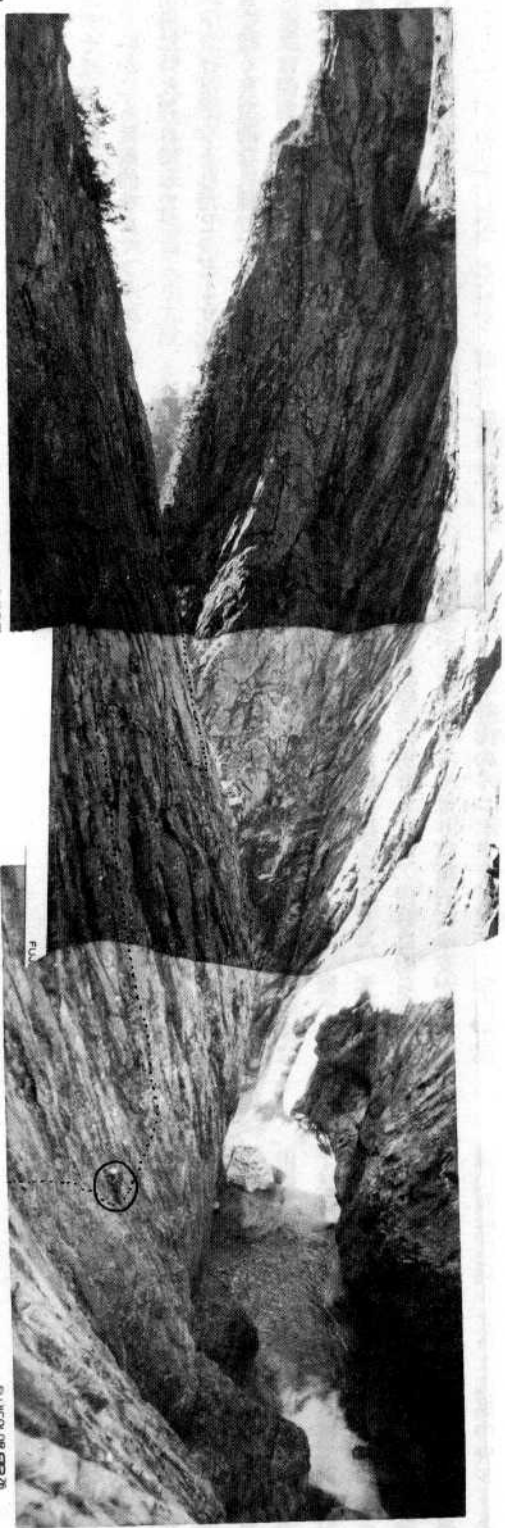
大学山岳部の活動に陰りが出はじめたのは、大

学紛争のせいばかりではありませんでした。六〇

〜七〇年代の日本経済の高度成長は、ベトナム戦

争に象徴される外需と公害の見本市とさえ言われ

た日本企業の杜撰さによって支えられていまし



ゴルジュ内のトラバース